20008年度第1回国立民族学博物館共同研究会「捕鯨文化の実践人類学的研究」2008年11月23日(日)　第2演習室

日本における捕鯨文化研究の動向と課題

岸上伸啓
（民博･総研大）

１　はじめに

・クジラについて(ハクジラとヒゲクジラ　82種)
・捕鯨について（先住民生存捕鯨、商業捕鯨、小型沿岸捕鯨）
・日本における捕鯨文化研究の研究動向
・欧米における捕鯨文化研究の研究動向（Freeman, Kalland ほか）
・今後の課題と共同研究会について

２　考古学的研究

２－１　ヒトとクジラの歴史は長く、多様。

・ノルウェー北部レイクネスの岸壁画にクジラ(BC5000年ごろ)
・縄文時代の鯨類利用
・9~10世紀にノルマン人からバスク人に捕鯨が伝わる。
・チュコト半島では、紀元１～２世紀ごろに捕鯨を開始
・アラスカ先住民の捕鯨(チューレ文化　AD1000ごろ)
・韓国の盤亀台(バンキダイ)の先史岩刻画

２－２　平口哲夫(2003)ほかの考古学的研究

・北西部から南西部にかけての九州の縄文中期から縄文後期に大型鯨類(ナガスクジラ、マッコウククジラ、イワシグジラなど)の椎端骨を土器制作マットに利用
・石川県の真脇遺跡(縄文時代の前期後葉～中期前葉、約5000年前)でカマイルカなどが出土。分配や祭祀が行なわれたらしい。

２－３　山浦清(2008)の研究

・北太平洋沿岸諸民族によるクジラ猟の儀礼の比較

３　歴史学･民俗学的研究

３－１　神長英輔(2001,2001)の研究

・東北アジアにおける近代捕鯨業についてロ米会社との関係から研究

３－２　立平進(1995)、鳥巣京一（2004）、中園成生(1999)、秀村選三(2007)他
・西海捕鯨の研究
３－３　羽原又吉（ゆうきち）(1933,1955)
・土佐と紀州の捕鯨研究
３－４　和田勉(1968, 1971, 2005)
・伊勢、紀州、熊野灘の捕鯨
３－５　谷川健一編(1997)
・『鯨・イルカの民俗』(日本民俗文化資料集成⑱)　三一書房
日本における鯨やイルカの民俗学的研究
３－６　都築博子(2001,2003)
・太平洋･東アジア地域におけるアメリカの捕鯨と 19 世紀の国際関係
３－７　森田勝昭
・『鯨と捕鯨の文化史』(1994)
近代捕鯨の誕生、ヤンキー捕鯨、日本の捕鯨･鯨組、旅行記や専門書における鯨、日本とアメリカ人捕鯨、近代捕鯨の始まりと終焉、鯨の意味論
３－８　山下渉登（しょうと）
・『捕鯨 I・II』(2004)
捕鯨業の成立、日本の捕鯨、日本の網捕り式捕鯨文化、鯨組、ヤンキー捕鯨、近代捕鯨、南氷洋捕鯨、国家戦略としての捕鯨、乱獲と捕鯨管理(捕鯨業 400 年の技術・組織・利用の経済･文化史、近代捕鯨と管理の展開、環境問題と捕鯨文化の地域差)
３－９　小島孝夫（1989、2004）
・房総のツチクジラ漁

４　文化人類学・社会学的研究
４－１　秋道智彌の研究
・『クジラとヒトの民族誌』(1994)
環太平洋的な視点からのクジラと人の民族(関係)誌
分類、図像と神話、環太平洋のクジラ文化の比較、先住民文化と商業捕鯨
・クジラをコモンズ論や所有論から論ずる(秋道 1999)。
・オセアニア社会の首長階級にとっての財貨としての鯨の歯
(Akimichi 1992)
４－２　竹川大介の研究

・ソロモン諸島マライタ島のイルカ追い込み漁と肉･歯の分配流通
（竹川 1995）
・伝統的な生態学的知識(TEK)

４－３　浜口尚の研究
・『捕鯨文化論入門』(2002)
日本の捕鯨、IWC と捕鯨問題、世界の捕鯨、持続可能な資源利用
・セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸国ベクウェイ島の捕鯨の現状、捕獲・利用、資源管理(2000、2003、2006 ほか)
・観光開発(1995、2001)
・アラスカとロシアの先住民生存捕鯨の経緯と現状(2003)

４－４　岩崎=グッドマンまさみ
・鮎川浜や網走の小型沿岸捕鯨共同体の研究(Iwasaki 1994、岩崎 2005)
・イヌビアルイットのシロイルカの資源管理(Iwasaki 2005、岩崎 2003)
・イヌビアルイットのホッキョククジラ猟(岩崎 2005)
・IWC のインターアクション分析：価値の対立構造(岩崎　2005)
・アイヌ民族の捕鯨とその復活(岩崎･野本ら 2000)
・北部ノルウェーの小型捕鯨(岩崎 1997、2005)

４－5　大曲佳世
・政治資源としてのクジラ(2002)
・IWC における国際対立の変遷（大曲 2003; Ohmagari 2005）

4－６　高橋順一、ミルトン・フリーマンほか
・日本の小型沿岸捕鯨の研究(フリーマンほか 1989)
歴史、小型沿岸漁業、共同体、鯨肉の商業･儀礼流通、房総のツチクジラ猟、食文化、信仰、モラトリアムの影響、第三の捕鯨
・太地の民族誌(高橋 1992)
鯨の発見、捕獲、加工処理、分配、消費の諸活動とそれらと関連する知識、技術、価値観、信仰、組織、制度、慣習が有機的統合体を形成
・捕鯨の町太地のアイデンティティとシンボル使用(高橋 1987)

４－７　山口未花子(2007)
・網走の小型沿岸捕鯨（ツチクジラ）の乗組員、とくに砲手の研究
乗組員構成、訓練体系、宗教・禁忌、ツチクジラに関する知識、捕鯨活動

４－８　小島曠太郎と江上幹幸（ともこ）
・インドネシアのレンバタ島ラマレラ村のマッコウクジラ猟
(江上･小島 2000)
伝統捕鯨、交換のための捕鯨、鯨肉の流通、食生活、料理

・クジラの民ラマレラ村民の民族誌(小島・江上　1999)
男のくらし(クジラ猟、漁業、造船、儀礼、漁具、操船術など)
女のくらし(女の仕事、定期市、行商、生産：織物･塩･石灰、交易、加工、料理など)

４－９　池谷和信

・チュクチのツチクジラ猟活動と地域経済の中での捕鯨
(池谷 2006, 2007)

・なわばり(池谷 2007)

４ ―１０　岸上伸啓

・カナダ・イヌイットのシロイルカ猟の利用と管理
(岸上 2001、2002、2003)

・アラスカのイヌピアックのホッキョククジラ猟と分配(岸上 2007)

４ ―１１　李善愛

・韓国の沿岸捕鯨をめぐる地域文化(李 2006、2007)

４ ―１２　河合利光、豊田由貴夫、中山和芳

・ミクロネシア・チューク環礁(河合 1993)
・ミクロネシア地域の捕鯨船の寄港とその影響(豊田 2006)
・ミクロネシアのカロリン諸島の歴史においてビーチコマーが果たした役割(中山 1998)

４－１３　名取武光(1945、1945)

・噴火湾アイヌの捕鯨

４－１４　渡部裕

・アイヌの鯨類の狩猟方法、利用、交易(渡部 1992)
・アイヌ、チュクチ、アジア・エスキモーらの捕鯨(渡部 1994)
・北東アジアにおける鯨の利用と信仰(渡部 1995)

４－１５　渡邊洋之

・日本における近代捕鯨の展開と鯨肉食の普及、乱獲の論理、捕鯨問題における「文化表象」の政治性(2006)

４－１６　河島基弘

・ヨーロッパ人のクジラ観と反捕鯨活動(Kawashima 2004, 2005, 2009)

４－１７　丹野大(2004)

・米国による日本たたきとしての反捕鯨問題（アメリカ研究）
・アメリカの「日本人に対する人種差別」や「文化帝国主義」の研究

５　水産経済学など関連分野

５－１　大隈清治

・『クジラと日本人』(2003)：日本の捕鯨問題の現状と将来

５－２　遠藤愛子、山尾政博

・現在の鯨肉のフードシステム（流通）（遠藤･山尾　2006、遠藤 2008）

５－３　岸本充弘

・関門地域における鯨産業・鯨文化形成(岸本 2006)

５－４　石川創

・鯨の人道的な捕殺(石川 2000)

・ノルウェーの捕鯨の報告(石川 1999a~e)

５－５　柿沼孝子

・文学作品を通して捕鯨について日米文化を比較(2007)

５－６　藤島法仁・松田惠明(2001)

・アラスカ・エスキモー捕鯨コミッションの資源管理制度

５－７　立教大学グループの研究（2004~2007 年度）

・荒野泰典(文学部)基盤研究 A「グローバリゼーションと反グローバリゼーションの相克―捕鯨を手がかりとしてー」

６　研究課題と研究方法

６－１　研究課題

(1)先住民生存捕鯨の現状と比較研究

(2)日本の小型沿岸捕鯨

(3)商業捕鯨と IWC

(4)クジラ観の通文化・通時的研究

(5)クジラと人類の関係の人類史的研究

(6)反捕鯨運動の研究

(7)クジラ文化の持続と変容(考古学･歴史学など)

(8)アイヌの捕鯨およびその復活

など

６－２　研究方法

・考古学･歴史学

・文化人類学(生態人類学的アプローチ、ポリティカル・エコロジー、ポリティカル・エコノミー、インター・アクショナル分析など)

７　共同研究会について

７－１目的

人類はこれまで捕鯨を行い、鯨を食料や原料として利用してきた。世界各地には捕鯨や鯨食を生活の核とする文化が存在している。しかし現在では国際捕鯨委員会での決定により、一部の先住民による生存捕鯨や小型鯨類の捕獲が条件付で認められているものの、大型鯨類の商業捕鯨は事実上、不可能になっている。さらに環境 NGO の活動により、捕鯨禁止のための活動が地球規模で繰り広げられている。このような状況の中で多くの社会において鯨は食料資源ではなくなりつつある。このように人類と鯨類との関係は歴史的に大きく変容してきた。

本研究会では、アラスカやチュコト半島の沿海、カナダ西部極北地域、グリーンランド、カリブ海などで実施されている先住民による大型鯨類および小型鯨類の捕獲、日本の小規模沿岸捕鯨、かつての欧米の大型商業捕鯨、国際捕鯨委員会、欧米人の鯨観、反捕鯨を訴える環境 NGO を研究対象として取り上げ、文化人類学的な視点やポリティカル・エコロジーの視点から世界各地の捕鯨と捕鯨文化の歴史と現状を把握するとともに、国際的な捕鯨問題の争点を検討することを目的とする。さらにこの研究を通して、人類と鯨類の共存のあり方、すなわち人類による鯨資源の持続可能な利用のあり方を模索し、提言する。

７－２ 研究の意義

文化人類学や歴史学、社会学においては、特定の時代や地域の（個別の）捕鯨や捕鯨文化に関する研究が多数行なわれてきた。しかしながら、人類と鯨類との関係に関して歴史的かつ通文化的な視点から比較検討した研究はきわめて少ない。この研究では、人類と鯨類の関係の文化的、地域的、時代的な共通性や多様性を解明することができる点において学問的に意義がある。

現在の鯨類をめぐる国際的な政治問題は、科学的な根拠に基づく論争というよりもきわめてイデオロギー色のつよい政治的な紛争の観を呈している。今回の研究では、個別の捕鯨文化の報告と比較検討のみならず、欧米人とそれ以外の人々の鯨観を比較し、国際捕鯨委員会の展開をも研究対象として検討し、現代の捕鯨問題を歴史的に相対化する。したがって、この研究は、人類と鯨類の共存のあり方について歴史性や地域性を踏まえた上で、鯨類をめぐる国際的な政治紛争の解決に貢献できる可能性がある。すなわち、この研究には実践的な意義もある。

７－３ 期待される成果

本研究は、次のような成果を期待することができる。

①先住民生存捕鯨や商業捕鯨、沿岸の小規模捕鯨について世界各地の個別の事例に基づきながら、歴史的な変化や現状について把握することができる。さらにそれらを地域的・歴史的に比較することによって、捕鯨の社会経済的な重要性や、捕鯨の禁止による社会文化への諸影響を通文化的に解明することができる。
②国際捕鯨委員会の動向や各国政府の捕鯨に関する立場を歴史的に相対化させることによって、現在の国際的な捕鯨問題は科学的な論争ではなく、きわめてイデオロギー的な政治的な紛争であることを検証し、問題の所在を明確に提示することができる。
③人類と鯨類との関係を地域的・歴史的に比較することによって、人類と鯨類との共存関係について新たなあり方を提案できる可能性が高い。

７－４　研究の実施計画

第 1 年度：2008 年度
第 1 回の研究会「問題提起と今後の課題」: 研究代表者が問題提起を行う。それに基づいて、全員で検討し、全体の研究の方向と内容を確認するとともに、各自の研究の分担を明確にする。
第 2 回の研究会「捕鯨の考古学的･歴史学的研究」: 考古学と歴史的な立場から、極北地域の捕鯨、日本の伝統捕鯨について報告し、検討を加える。

第 2 年度(変更可能)：2009 年度
第 1 回の研究会「商業捕鯨の歴史と展開」: 18 世紀以降に盛んになった商業捕鯨の展開について検討を加える。
第 2 回の研究会「先住民捕鯨の歴史と現状」: 世界各地の先住民生存捕鯨の歴史と現状について検討を加える。
第 3 回の研究会「日本の小規模沿岸捕鯨」: 日本の小規模沿岸捕鯨について検討を加える。この研究会は、捕鯨基地のある網走、鮎川、函館のいずれかで実施する。
第 4 回の研究会「アイヌ民族の捕鯨」: アイヌ民族の捕鯨の歴史と現状を取り上げ検討する。

第 3 年度(変更可能)：2010 年度
第 1 回の研究会「人類と鯨類の関係の多様性」: 人間と鯨類との関係を軸に欧米人、先住民、日本の捕鯨者の鯨観について比較検討する。
第 2 回の研究会「国際捕鯨委員会の展開と捕鯨問題の現状」: 国際捕鯨委員会を対象として、その歴史と現状をもとに捕鯨問題を検討する。

第 3 回の研究会「捕鯨文化の再検討」: 研究代表者がこれまでの研究会を振り返り、総括し、問題点を明確にさせる討論を行なう。
第 4 回の研究会「公開シンポジウム : 捕鯨と捕鯨文化の人類学的研究」: 研究分担者が各自の研究成果を発表し、全員で検討を加える。シンポジウムは、東京か大阪で実施する。

７－５　研究成果の公開計画
①最終回に、東京か大阪のダウンタウンにおいて公開一般シンポジウムを実施する。
②シンポジウムの成果をとりまとめ、論文集を作成し、商業出版をする。ただし、論文集が大部になる場合には、『国立民族学博物館調査報告（SER)』として出版する。
③研究会の成果は、研究が随時、論文として学術雑誌で発表するとともに、みんぱくのホームページを利用して成果を速報的に随時発信する。

７－６　「捕鯨文化の実践人類学的研究」について検討
・比較と総合をキーワードとした研究会
・実践まで対象範囲に入れる。
・研究対象、時代、地域(通文化を含む)、トピック
・各共同研究員は、何をどのような視点から研究するか？
・成果のまとめ方(シンポジウム、論文集)